

山科醍醐こどものひろば演劇部ぽっぷ・こーん 「けしゴムおばけ」

「山科醍醐」の地で、こどもたちと大人たちで「演劇」を創ることに取り組んでいる「集団」とか。目標は「自分のことを大好きになること」と「仲間っていいなと思えること」。これはいい。

世の中いまや、どこもかしこも「地縁」そして「血縁」さえ崩れかけている。〈京都〉の地でさえそうなのか。この「現在」、自分とは、仲間とは、を問い返す試みは大切なことだと思う。

小学校6年生のマサミの前に出現したのは、自分の気にいらないものをナンデモ消してくれる「けしゴムおばけ」。さて、〈マサミはこれをどう使っていくのだろうか〉、という展開の物語。

「舞台美術」は様々に考えられている。吊り物、立て物、そして置き物・・・と。ただ思うに、肝心の「けしゴムおばけ」の造形がややおとなしい。例えば、通常は「現在の形状」でも、何かを消す時には、〈変化する〉とかがあれば、インパクトが出てくるのではないか。それは「邪道」とする考えもあろうが、私はそれが欲しい。

加えて、「消しかた」の変化も必要ではなかろうか。「ヒト」を消す場合、「モノ」を消す場合、それによって「舞台」に変化が生まれてくる。「児童青少年」対象の舞台では、このことが「大事では」と私は思っているのだが・・・。

この舞台、子どもたちの「演技」から、感じることは、「モノローグ」の台詞はある程度出来ている。だが、「会話・対話」になるとあまり良くない。

「自分の気持ち」は表現出来る。だが、「会話・対話」は相手の気持ちを汲み取ってこそ「自分」に実感が生まれる。これは「大人たち」は出来て、「子どもたち」は未熟、というのではない。

ヒトは、「他」と触れ合い交流することにより、「会話・対話」の感情表現を身に付けるものである。その時の自身の感情により、そして「対話」の相手により、「自分」をどう表現していくかを考えている。最近、それが「未熟」になった気がしてならない。

これこそ現在、世の中の風潮の中で、「演劇表現」を通して、学ぶ必要があるのではないか、と言う思いを強くする。

総体的にみて、子どもたちの「演技」は素直だ。よくある、変な「舞台的演技」はない。だからもっと、人物の感情表現、相手はどうなのか、自分はどうしたいのか、を客観的にとらえ、観客にいったい「何」をみせたいのかをもっと考えさせてもいいのではないか・・・そして、そして大人たちは何をサポートするのかを考えたい。